

守
らせん

発情生徒会長!

小説 ナルカク
挿絵 羽霜ゆき

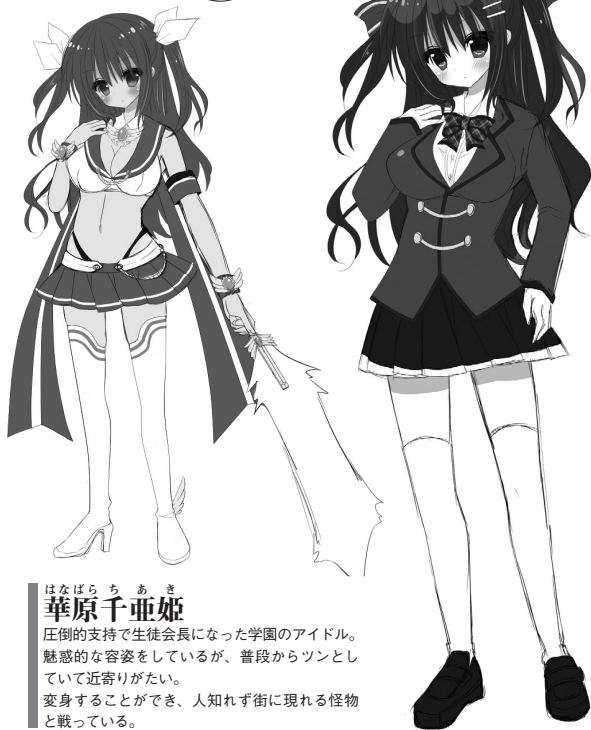
立ち読み版



序章	生徒会長と平凡少年	006
第一章	ツンデレ戦士と発情エッチ	024
第二章	ヤキモチでツンツンで連続お搾り	065
第三章	ツンツン体操&デレデレお風呂	101
第四章	恋人としての初エッチ	148
第五章	学園祭デートのエッチご奉仕	200
終章	二人の力	248

登場人物紹介

Characters



はなばらちあき
華原千亜姫

圧倒的支持で生徒会長になった学園のアイドル。
魅力的な容姿をしているが、普段からツンとしていて近寄りがたい。

変身することができ、人知れず街に現れる怪物と戦っている。

ふじたしん
富士田進

読書が好きなごく普通の男子。特にヒーローが活躍する物語が好き。

多くの男子と同じく千亜姫に惹かれている。

彼女の助けになるならと危険を顧みず怪物と戦う道を選ぶが。

片思い中の、生徒会長の口責めがエロ過ぎて、勃起したままだった。そう説明しようとしても、告白する勇気が出ずに躊躇ってしまう。

「やっぱり嘘ついてるじゃない！ だったら今度こそ、ぜ、絶対満足させてみせるわッ」
千亜姫は何やら意を決し、いきなり飛び掛かってきた。

「うわ！」

バランスを崩し、重なったマットの上に押し倒されてしまう。起き上がろうとするが、少女が何の迷いもなく上に乗ってきた。

肉付いた両脚を大きく開き、腰周りに跨られてのアヒル座り。ブルマのサラリとした触り心地や、もっちりとした太股に包まれながら、絶妙な体重で仰向けのまま拘束される。

「え!? ち、千亜姫さんまさか……ここで!？」

「決まってるでしょ！ だって昨日あれだけ……く、口でシてあげたのに……全然満足しなかったんだから……まだ女怪物の影響が、残ってるはずよ」

今からするのには正当な理由があると、そう説明しながらゆっくりと身を揺する。

「い、いや大丈夫だよ！ ……あ、そう！ 今日の朝何回も自分で……お、オナニーしてきたから大丈夫ッ」

妖しい摩擦を股間に与えられ、昨夜の様に搾られてしまうと恐れてごまかす。
「ッ……アンタ、雑誌か何かの女の子で……シてきたって言うの!？」

しかしそれは逆に、彼女をより怒らせてしまう事態となつてしまった。

(ど、どうして逆効果になつちゃうんだ！ 絶対に止める事は出来ないの!?)

何を言つてもダメなのかと悩む暇もなく、千亜姫は上に着ているジャージのジッパーを引き下ろす。小さな摩擦音が暗い倉庫に吸い込まれ、静かにはだけられた。中から現れたのは、白い体操服。上半身にびつたりと密着し、豊満な巨乳と括れた腰、抜群のスタイルを薄生地が包み込んでいる。しかし、魅惑的なのはそれだけではない。

(匂いが……ちよつぴり汗かいてて……い、いけない本当にシたくなつちやいそう!)

ジャージの中に押し留められていた、熱気と共にむわつと昇る汗の匂い。少女独特の甘い香りと相まって、鼻をねつとり魅了してくる。それだけで股間が反応してしまった。

「自分だけでシてちゃ、いずれ我慢出来なくなつて、怪物になつて周りの女の子を襲っちゃうわよ!! そうなる前に……あ、アタシが全部、搾り取つてあげるわ!」

(あれ? で、でも千亜姫さんも、パートナー組む前は一人でシてたんじゃ……?)

それに途中でミスした時も、ここまで怒られる事はなかった。身体は全然問題ないといくら訴えても彼女は聞く耳を持たず、白体操服の裾を掴んでゆつくりずり上げる。

(うあ……じ、自分から……体操服を……)

積極的過ぎて驚きを隠せない中、肌に張り付く生地がどんどん捲り上がる。滑らかな腹筋に腰の括れ、そして張り出す巨乳に裾が引つ掛かるが、無理矢理引き上げて、

——たぶんッ。

柔らかさを誇張する様に揺れたわみ、可愛らしい下着に包まれた肉果実が露になった。服越しに触った事はあったが、いざ目の前にすると言葉を失う程見入ってしまう。

「ッ……ほ、ほらやつぱり。アタシの胸……ジッと見てるじゃない！」

少し顔を逸らしつつ、頬を真っ赤にして睨み下ろしてくる。自ら体操服を鎖骨まで引き上げて、ブラジャーと乳房を剥き出しにしたが、やはり羞恥を感じているらしい。

彼女が少し身体を揺すっただけで、下着に支えられた胸谷間が、艶かしくはすむ。

半脱ぎのいやらしい姿と相まって、大きくなる剛直が、跨るブルマ尻を突き上げる。

「んッ!? ……朝に沢山シてるわりには……大きく、なってるじゃないの」

その感触に千亜姫はピクンッと震え、可愛らしい声と共に濡れ始めた瞳を向けてくる。妖しく、官能的な表情は、昨夜の女怪物の影響を受けていた物と同じ。

「え!? ちょ、ちよっと……千亜姫さんも、怪物の影響がまだ残ってるみたいだよ！」

「そう……はあ……ならやつぱり、お互いの為に、発散しないとダメじゃないッ」

欲望が再びくすぶってきたのか、次第に声が艶っぽく色付く。体操服姿の生徒会長は、ゆっくりと腰をくねらせ始めた。

（ああ、動かれたらッ……ほ、本当に我慢出来なくなっちゃう！）

止めなければいけない。身体の上の千亜姫をどかせようとして腰を掴むが、妖しい摩擦

を与えてくる女尻が気持ち良過ぎて、このままシてもいいと思つてしまう。

「あッ………どんどん、大きくなって………体操服のまま、気持ち良くなるなんて変態ねッ」ブルマに包まれた、臀部の二つ山。肉々しいその谷間には、小さい陰唇丘が盛り上がっている。己のズボンの膨らみが、滑らかな恥裂布で抜かれ始めた。

——シユルッ……シユッ……スリユン。

女部を覆う繊維と、自分の股間生地が奏でる妖しい音。それが体育倉庫に溢れてゆく。「はぁ、はぁ……切なそうな顔して……アタシとシたくて、ンッ……堪らないんじゃないのッ……はぁ……どうなのよ？」

挑発的な言葉を耳に流し込む千亜姫は、完全に昨日の欲望を復活させていた。

「本当に、バカみたいに硬くして……アタシのパートナーなのに、情けないわよ」

熱い息遣いは、昨日ぐらいじゃまだまだやりたりない、と言わんばかりに淫質。

少し恐いがそれ以上に、今から搾り取られる高揚感が、背筋に這い上がってきた。

「こっちの面でも、ンッはぁ……アンタを徹底的に、鍛えてあげるわ」

そう口にして少し腰を浮かせると、こちらのズボンを脱がせてくる。半勃起状態のペニスを素早く露出させられると、続いてブルマの陰部布を、下着ごと横にずらす。

(ち、千亜姫さんのおま○こ……もう濡れてる!!)

ぷっくらとした肉丘に走るワレメ。少女の細い指先がソコをくばあつ、と割り開く。

桃色粘膜から甘酸っぱい香りの蜜が溢れ、糸を引きながら真下の剥き出し肉棒に滴る。熱くてねっとりした愛液が竿を伝う感触に、亀頭がビクビク反応して勃起が更に強まった。「入れちゃうから。アンタの硬い……お、おちんちんを、気持ち良くさせちゃうからッ」興奮しつつ、卑猥な単語を口にする生徒会長。発情した姿を目の当たりにし、進も男として理性が崩壊しそうになるが、精一杯我慢する。

「や、やっぱりやめた方が」

両手を伸ばしてどかせようとするが、

「ダメ……鍛えてあげるって、言ったでしょ？」

細くて綺麗な指に搦め捕られてしまう。ギュッと手を握られつつ跨られ、完全に拘束されてしまった。

（襲われちゃうんだ……今から沢山、搾り取られちゃうんだ！）

千亜姫を怪物にしない為にも、必要な行為。それ以前に、今からの事を想像しただけで頭が痺れ、全身が期待に麻痺し、もうセックスしないと気が済まない。

彼女は淫液に塗れたワレメを、雄棒目掛けて、ゆっくりと下ろしてくる。

——にゅちゅう……ずぶりゅりゅんッ！

「はあ、アッ！……んううッはああ！」

反り返った一物がヌメる膣口を押し広げ、すんなり柔壺に飲み込まれた。

（ああッ、やつぱり……初めての時と同じで、キツいの……気持ちいい！）

熱く潤んだ中に入り込むと、早くも排泄を訴えて男根が一気に勃起する。

「ひゃあッ、ああッ……また大きくなって……ンッ……太い」

膣をより拡張すると、少女は半脱ぎの身体で、下着に包まれた乳房を震わせた。

そのちよつとした痙攣を起点として、搾精の為の摩擦運動が始まる。

「ん、ンッ！ はあ、どうなのよ。アタシの中で、もう気持ち良くなってるんでしょ？」

腰を妖しく前後させ、ペニスを揺すり抜きながらの質問。

生徒会長の目的通り、壺内は精液を搾り取るうとしている。ヒダが雄竿にびつたりと密着し、敏感な亀頭や細かい溝にしゃぶり付いてくる。その上、不定期に収縮する細道が思わぬタイミングで摩擦を強めたり優しくしたりで、快感に堪えられる訳がない。

「す、凄く気持ちいい……けどでも……こ、こんな所で……」

場所が場所なだけに、少し心配だ。いくら使われていない体育倉庫とはいえ、誰も訪れないとは限らない。しかし、古い道具の臭いでいっぱいだった室内が、千亜姫の匂いで満たされていく事や、見つかるかもしれない不安が、変な興奮に変わってしまう。

「だったら、ンッ……早く全部、出しちゃいなさいよ……はあ、アッん……アタシの身体で満足して、欲望を全部、発散させなさいッ」

それは彼女も同じらしい。匂いだけでなく、淫声までもがマットや跳び箱、ボールに染

み込む様な甘い物に変わり、執拗極まりない腰振りに発展していく。

(ああで、出ちゃうッ……やっぱりやめた方が……で、でも千亜姫さんの欲望が……)

いまだに少女の身体に残る、女怪物の影響。それを発散させて、怪物になるのを阻止せねばと思えば、エッチを止める事に躊躇する。

「はあ、はあッ。アンタの、ビクビクなってきたわよ……最初より、アッ！ 熱いし……もう出ちゃいそうなんじゃないの？」

どんどん射精が近付いてくるペニス。それを中で感じた少女は、前後に揺すっていた腰を上下に振り始める。桃尻が何度も打ち付けられて歪み、セックスの音が耳に響く。

——パチュ、パン、ニチュ……パン、パンッ、パンッ！ パンパンパンパンッ！
「ンッはあ、ア!! また硬くう、はああ、アッはあうッ！ 身体が、溶けちゃいそう」

千亜姫の頬に浮かんだ汗が流れ、体操服の首周りを濡らす。あまりにも激しく身体を動かし始めた事で、彼女の乳房が下着から飛び出してしまった。

(ああ！ お、おっぱい……乳首が、目の前にッ！)

ブラジャーが下乳を支え上げる格好となる。解放されて自由になった巨乳がいやらしくはずみ、ツンと尖った桃豆が、妖しい軌道を描く姿に射精が早まる。

「あふうッ!! ああ硬くなり過ぎッ、あ、アッ!! アタシもい、イク……いつちゃうッ」
繋いだ両手を握り締めてきて、腰の性運動が更に苛烈になる。本能的で、衝動に身を委



ねる様な物で、身体の奥から溢れる絶頂に向かっているのだと、ペニスで実感する。

(千亜姫さんイクんだ……僕のちんぼ擦りまくって、イッチャうんだッ)

悶えながらも続ける姿が、女臆刺激と相まって、肉棒がドクンッと射精を訴える。

「進もイキなさいッ、もう出そうなんでしょ？ ん、はあ、アッ！ イキなさい、アタシの中で全部出しなさい……はあ、はあッ、我慢なんかしないで全部、ぜ……アッ!!」
突如、彼女は一段と大きな声を上げ、痙攣し始めた。

「ああ、い、イ、クッ……アタシがしてたのに、先にイッチャ、う、ううう!!」

精一杯絶頂を我慢しようとするが、顎が仰け反り、背中を反らせて胸を揺らし、身体が激しくヒクつく。それに合わせて、女壺が限界寸前の勃起を、ねっとり締め付けてくる。

(出るッ！ あああもう漏れちゃうッ！)

歯を食い縛り、マットに背中を擦る程我慢しても、ヒダにしやぶられる肉棒の先端から一旦溢れ出した我慢液は、止まる事を知らない。

(出る！ 出る出る出る！ 全部出るう!!)

——ピュピュ……ドビュウッ、ドビュウッ！ ドビュピュッ!!

ペニスの小さな痙攣が大きな物へと変化し、激液を腔内へとぶちまけてゆく。

「んううッ! はあ染みるう……ああ熱、中……はああ〜」

絶頂を迎えたばかりの千亜姫の身体に、内側から灼熱液を注ぐと快感に身を揺らす。二

人の結合部から溢れ出しそうなモノを、彼女は更に腰を沈めて奥へ奥へと導いていた。

「はあ、はあ……まだまだ、こんなのにじゃ終わって……あげないんだからあ」

疲れてまどろみながらも、休憩する事なく、直ぐに腰振りを再開させた。

「!? 千亜姫さんッ、ううッ……い、今イッてるのに」

「当然でしょ、アンタのおちんぼが、元気になるまで……このまま一気に、んはあ……
ずつと射精させちゃうから」

休ませてあげない、と妖しく囁く発情生徒会長。

(普段とこんなに変わっちゃうなんて……千亜姫さん、エッチ過ぎるよ!)

怪物の影響でどんどん扇情的になる。その姿に改めて、欲望がどれ程恐ろしいのかを理解している、彼女はいきなり上体を倒して覆い被さってきた。

細くてしやかな指先でこちらの体操服を掴み、引き上げる。一体何をするのかと思いきや、そのまま首を伸ばしてきて、

「ん……チュ」

「え? あひゃッ」

なんと、胸板にそつとキスをお見舞いしてきた。射精中のペニスに与えられる強烈な刺激と違い、くすぐったいキスに変な声を出してしまう。

「ん、チュウ……チュ、チュッ……」

胸だけでなく、首や肩、更には頬にまでキスの雨を降らされてしまう。

「千亜姫さん、な、何してるの……くすぐった……や、やめて」

「ダメよ……ちゆ、チュ……進はアタシのパートナーなんだから……んチュウウッ。キスの跡を付けて、アタシの側にいつも居ないといけないって、思い知らせてるの……こうするの、平情の決まりなんだからッ」

「そんなルールがあるとは、一言も聞いていない。しかし彼女はマークを残し続けた。

「ほら……アンタもアタシに……き、キスして……跡を付けなさいッ」

これは当たり前前の事よ、と言いながら、腰を振りつつ頬を突き出してくる。

うっとりとした快感顔で、恋人にキスをねだる様な姿に進はドキッとし、二度目の射精に向けてペニスが大し始める。

「……あ……で、でも……僕達のキスの跡が皆に見つかったら、その……僕と千亜姫さんが……こ、恋人同士だって勘違いされちゃうかも」

好奇心旺盛な同級生達が、どちらか一方のキスマークを見つけた時、相手を発見しようと全力になるのは目に見えている。もし、お互いの物が見つかってしまえば、生徒会長と自分がそういう関係にまで発展していると、あつという間に噂になるだろう。

（そうになったら、ただでさえ男子に恨まれてるのに、身が持たないよ）
クラスメイト達の反応が恐ろしくて、拒んでしまう。

自ら凄まじい状態を作っていた事に気付き、男の感情が込み上がり始める。雰囲気は呑まれそうで、早く風呂を出る為にシャワーヘッドを手渡した。

「? アンタその手、どうしたの……それに、服も汚れてるじゃない」

背中越しに振り返る少女が、手の異変に気付く。怪物に触れた際、まるで焼いた鉄の様な熱さで、手が火傷して赤くなっていた。シャツやズボンには、液がへばり付いている。

「え? ああさつき触ったから……でも見た目程痛くないし、大丈夫だよ」

直ぐ手を離れた為、軽い火傷で済んだ。ちよつとヒリヒリするだけで、制服ももう溶けていない様で、全く問題ない。このまま自分の家に帰り、シャワーを浴びれば大丈夫だ。

「……………ほら、背中向けなさい」

「え?」

「アンタも制服の背中汚れてるだろうし、アタシが洗ってあげるわよ」

まさかの申し出に、一気にパニック。自分から作った状況とは言え、思いを寄せる少女と風呂に入り、身体を流してもらうなんて。頭がどうにかなくなってしまいたいようだ。

「いやいや! だ、大丈夫大丈夫! 走って家に帰って、自分で……」

「アタシが洗ってあげるって、言ってるのよ?」

何か文句あるの? と言いながら、背中を向けていた千亜姫が向き直ってくる。汚れを流そうとするあまり、己の身なりがどうなっているのか、すっかり忘れていたらしい。

（うわッ！ す、スケスケで……しかも穴開きで……ま、マズい！）

大小様々な穴が無数に開いた、上着やニーソ靴。その穴から豊満な巨乳と、肉付いた太股がむっちりと零れているだけでなく、水分を含んだ布がうっすら透けている。辛うじて隠れていた乳首の桃尖りや、股のワレメに張り付くショーツまでも透けて見えてしまう。

一瞬で股間が反応してしまい、それを隠す為には背中を向けた。

「最初から素直に、そうしてればいいのよ……流すわよ？」

ワイシャツの上から、温かいシャワーが掛けられる。じんわりとお湯が染み込むのがむず痒いが、気持ち悪い液が流れ落ちていると考えれば、不快ではなかった。

（な、なんかこの状況って……本当に千亜姫さんとお風呂入ってるみたい……）

声が反響する壁と床。濛々と立ち込める湯気。背中に感じるシャワーの水圧。そして、彼女がスケスケのコスチュームであると考えれば、心臓がバクバクと脈打つ。

「進………ありがと」

「え？ うん……えッ!？」

お礼を言われた様な気がしたが、意外過ぎて自分の妄想ではないかと疑う。

「何驚いてるのよ……アタシがお礼を言ったのが、そんなに不思議？」

「い、いやお礼なんて……言われる様な事なんて、何もしてないのに」

「助けてくれたお礼に決まってるでしょ。狼怪物の時も、ちゃんとお礼言えてなかったし

……さつきも言い過ぎたわ……アタシって、まだまだね」

己の不甲斐なさを認めるその姿が、日常で見せる凛々しさと違い、儂く見えてしまう。完璧に物事を片付ける故に、失敗をする事が少なくて、落ち込んでいるのだろうか。

「でも、千亜姫さんはやっぱり強いと思うよ……今回は、敵の罠って言うか……たまには失敗する事もあるだろうし、僕が居なくても絶対、倒せてたと思う」

同じ失敗は、二度としないだろう。だからこそ、本当に千亜姫は強いのだ。

「……そうだったとしても、進にはずっと、側に居て欲しいわ」

「え？ 僕がなに？」

シャワーの音で小さな声が聞き取れず、振り返って耳を傾ける。

「ッ！ な、なんでもないわよ。いいから、前向いてなさい！」

ハツとして顔を真っ赤にし、ごまかしついでにシャワーを顔に掛けてきた。

「うわ!!」

驚いて飛び跳ねた際、床に流れる怪物液に足を取られ、倒れそうになる。目を瞑ったまま何かにはさまろうと、急いで手を伸ばす。

「あ、ちよ、ちよつと!!」

有ろう事か、掴んだのは生徒会長の腕。彼女もバランスを崩してシャワーヘッドを放り投げ、こけない様に踏み留まろうとする。

少年は顔がびしょ濡れでまだ目が開けられず、取りあえずしがみ付こうとし、

——もにゅッ。

「え!? ひゃんッ!」

少女を後ろから、思わず抱き締めてしまった。とても柔らかくて、温かい物を掴んだと同時に、甘い悲鳴が風呂に響く。

ゆっくりと臉を上げ、手にしている物を確認すると、頭の中がピンク色で染まる。

(ああ柔らかい。これ、おっぱいか……濡れた服越しに触るのも……悪くないかも)

指をめり込ませれば、湿る薄生地からじんわりとお湯が溢れ出す。そして内側の肉々しい弾力が柔らかく形を変え、手に付いていた石鹸が泡立つのが、何とも言いがたい。

「ンッ! は、あ……し、進! なに触って、んふう、アッ!」

本能のままに指を動かし、振り返って肩越しに見詰めてくる生徒会長の、快感に悶える顔でゾクゾクとした感情が沸き上がる。

「ご、ごめん……はあ……でも離せなくて、止まらない……はあ、はあ……」

今直ぐ手を離さなければ。しかしいくらそう思っても、身体は全然言う事を聞かない。寧ろ背中にぴったりと密着して抱き締め、指の一本一本で彼女の胸を堪能してしまう。

「んンッ!? え、エッチな触り方……も、もしかしてアンタ……発情、してるの?」

言われて初めて、自分の中からとめどなく溢れてくる昂りの正体に気付く。

（そうか、僕……怪物の性欲に、取り付かれてるんだ）

その証拠に、液体怪物がした様に千亜姫にくっ付いて、離れたくない。このままずっと身体の感触と、濡れ透ける姿を見ていたいと感じる。

「はあ……ご、ごめん千亜姫さん、多分……発情しちゃってる……はあ……はあ」
謝罪の気持ちも一瞬で掻き消え、頭にあるのはいやらしい考えばかり。

（欲しい……千亜姫さんが、欲しくて堪らない……一つになりたいッ）

自慰に耽る時よりも遥かに強く、危険な感情が滲み出てくる。どんどん股間が大きくなり、膨らんだズボンテントが、少女の股の間に食い込む。

「んうッ!? あ、コレって……し、進の……あうッ」

太股をモジモジとされて、硬くいきり勃った肉棒を擦られる。それだけでもすこぶる快感を与えられ、欲望に追い風が吹き、本当に止まらなくなってしまう。

「……し、したい……の？」

生徒会長が、蕩け始めた朱色の横顔で尋ねてくる。

彼女もまた液体怪物と接触し、発情しているのを感じながら、頷く。

「……し、しかたないわね。お互いに怪物の影響、受けちゃってるみたいだし……パ
ートナーのアタシが、我慢して相手になってあげるから……早く始めなさいよッ」

壁に手を突いて後ろ向きのまま、背中を反らせて腰を突き出してきた。鋭い食い込みの

下着が尻の細谷間を渡り、淫裂を辛うじて覆っている光景が眼下に広がる。

（はあ、はあ……千亜姫さんもしたいんだ……エロ過ぎだよ！）

エッチを認めてくれた上に、立ったままする為のいやらしい格好を披露された。我慢出来る訳がなく、急いで膝立ちになると、スカートの中からショーツだけをずり下ろす。

「ひゃッ……ちよ、ちよつと進！ もう少し落ちついて……」

有無を言わず足から股布を抜き取り、床に捨てた。自分の目線が、千亜姫の臀部とびつたり合う。両手を桃尻に添えて左右に割り開くと、淫裂も一緒に妖しく割れた。

「ひゃ、うん……ば、バカ！ ど、ドコを見て……あ、アッ」

両親指で陰唇を開き、秘所を間近で凝視する。綺麗なピンク色の粘膜には幾重も愛液糸が伸びていて、小さな膣穴がヒクッ、ヒクッ、と引き締まっている。それに合わせ、新しい蜜が奥からトロトロと搾り出されていた。

（ココ……千亜姫さんのおま○こを、こんな近くで見たの初めてだ！）

二度交わっただけの初心な溝。それをしっかりと堪能しようと、口を開けて、

「え!? ま、まさかアンタ……い、いい加減に」

——はふッ、チュウ！ チユるるるるう~~~~!!

「あ、ふああ!? ンヤ！ はあああああああ~~~~!!」

雄の欲望のままに、吸い上げた。

「はあ、はあッ、千亜姫さんのま〇この味……いやらし過ぎだよ！」

大きく開かれた両脚。その内側に顔を埋め、尻を抱き抱える様にしてむしゃぶり付く。

「はあ、アッ！ ば、バカ！ いやらしいのはアンタ、ひやうう!? だ、ダメそんな、舌で舐め……あ、んう！ 吸うな、はじくなあッ」

壁に爪を立てながら、耳が痺れてしまう甘い声を響かせ続ける。

それを、陰唇と愛液に吸い付く己の吸着音で、更に覆い被せてゆく。

「全部舐めちゃうから……千亜姫さんのココ、残さずにッ」

内太股に垂れる汗と蜜を舌で拭い上げ、そのまま足の付け根を舐め回す。自分でも、どうしてこんなに卑猥な事をするのかと思う。しかし、身体は怪物の欲望に吞まれて必死に愛撫を求め、何が何でも彼女を気持ち良くさせようとする。

「あああ、も、もう……ひヤッ！ 変態、ド変態ッ……んううッ」

恥ずかし過ぎて何度も否定する。しかし、振り返ってくる顔は甘く蕩けている上に、震える腰でヒクヒクツと窄まる膣穴と尻穴を更に突き出し、快感を味わおうとしていた。

（千亜姫さんも、もっと気持ち良くなりたんだッ……なら、全力で!!）

素直じゃない少女により昂り、舌を出来るだけ伸ばして、激しく舐め回す。

「あ!? あああ、き、きちゃ……ん、ンッ、い、イッちやう……」

生徒会長が声を潜め、絶頂を訴えた。

それを聞き逃さず、トドメとして激しくアソコをしゃぶりまくる。

——んりゆりゆッ！ ジュリゆるるるうう！！ ぬちよ、ぺちよッ、くちよッ！

「んんッ！ ひうう!! あああダメダメダメッ い、イッちやう、舐められて、イッちやうからああ、変態なやり方であ、アアッ!! あああああああ!!」

激しい責めに堪えかねて、風呂の壁に身体を擦りつけながら、激しく絶頂痙攣する。
ニーソブーツの両太股に、顔を締め付けられるのが、非常に心地好い。

(ああ、もうダメだ……僕も、我慢出来ない!)

急いで立ち上がると、ズボンのジッパーを素早く引き下ろし、勃起を取り出した。

——じゅぶぶう……にゆるっんッ。

「あ!? あああ………ひやつうん！ い、今イッたばかりなのに……んんッあ!!」

余韻中の少女に入れると、上着に開いた穴から零れた乳首が、壁に擦れる。生徒会長は刺激で小刻みにピクッと震えて、それで更に胸尖りを擦る。

(はあ、はあ……全部、入っちゃった……)

中は愛液で潤みきり、奥までスムーズに挿入する事が出来た。ねつとりとした膣ヒダが何度も収縮し、肉棒を待っていたとばかりに歓迎する。

「やっぱり気持ち良過ぎッ……動くよ、千亜姫さん!」

止まってられない。彼女の細く括れた腰を掴み、硬く膨張した一物を出し入れする。

「アッ!? ま、待って、ん、ンッ! いきなり、は、や、いッ」

蕩けた中を更に解す。先端を奥深く差し込んで愛液を塗り、エラが抜け落ちそうになるまで入り口に引き返すと、生々しい吸着音が風呂に響く。

——ヌルウボツ! じゅぷぷ……グッポオ!

性交の音と少女の淫声が重なり合い、耳までもがセックスに酔いしれ始める中、ひたすら腰を振り続けた。お互いに濡れた服を着ているのに、不快感すら忘れていく。

「はあ、はあ……凄く締め付けてきて……千亜姫さんも、気持ちいいんだよね?」

「な、なにを聞いて……ん、ンッ……そんな事どうでも、いいから……はあ、はあ……」

肉棒を突き入れる度、少女の身体が小さく跳ねる。それを必死に隠そうとしているが、同時に肉棒を覆う膣壁摩擦も強まり、感じているのだとしっかり伝わってくる。

「良くない。はあ……千亜姫さんも発情してるんだから、僕のちんぽでもっと感じて」

これは欲望を発散させる為の行為。しかしそれも今では口実にしかならず、感じている生徒会長の姿を、液体怪物の様に少しでも近くで見たい。腰を打ち付ける角度を変え今までと違う膣内刺激をゆつくりと与える。

「んふう! はあ、あッ凄、い……ん、ンッ! 熱くてえ、はあ、はあッ。溶けちゃう」

濃厚で絡まる様な、敵の欲望が滲み出る性交を望んでしまう。

それは彼女も同じらしく、こちらの動きに合わせて腰をねつとりとくねらせ始めた。石

齷が泡立ち、彼女の尻が両太股を洗ってくるのに対し、肉棒は愛液ヒダでシゴかれた。

（うわ、一緒に掻き回すと……凄く熱くて、本当に溶けそう！）

早くも射精感が股から昇り、全身が痺れ始めてしまった。風呂場の中は石鹸と、彼女の甘い体香と蜜の匂いで充満している。鼻すら誘惑するその濃香で更に終わりが近づく。

（……あ……そうだ）

間近に迫った絶頂の前に、進はある事を思い出し、唇を少女の背中に近付ける。

「んッ!? え? し、進何を……」

背中にキスの雨を降らせ、何度も何度も強く吸い付く。跡が残る程に。

「体育の時千亜姫さんに、キスマーク付けてなかったから」

男子達に気付かれても、ちゃんと告白してなくても、千亜姫を自分のものにした。理性なんて捨て去って、本能的にキスを続ける。

「ば、バカね……そんな事気にしてないわよ。ん、ンッ……はあ……どうせなら、首とかにもマーク……付けなさいよね」

言われるまま、彼女の背中を昇って首周りにも、強烈に吸い付く。

「あ、はンッ! あ、アンタエロ過ぎよッ……はあ、ハッ……あッ!? ちょっと腰……んふふううッ!? そんなに捻らない、で……ああああソコ、だ、ダメえ!!」

もっと彼女を感じたいと、腰で「の」を描く様な動きをする。すると、亀頭が膣内の腹

側を扶った途端、彼女がビクビクッと一際強い痙攣に悶える。

「ココ？ ココが良いの？ ……もつともつとシてあげる」

怪物の欲望塗れで、どれだけ責めているのかハッキリと理解出来ない。ただ分かるのは身体の内側で激しく燃える感情と、肌を感じる千亜姫の官能的な柔らかさだけ。ペニスの動きを一段と速く、強くして弱い場所を突きまくる。

「?! はあああそ、そんな…：ひやうううッ！ よ、弱いトコばかりい！」

怒っている。しかしそれは建前で、気持ちいいからもつとシて欲しい。目尻に涙を溜めて涎を垂らしつつ、振り返る生徒会長の恍惚表情と、揺れる尻がそう告げていた。

（あああ、いやらし過ぎるよ千亜姫さんッ…：も、もう…：出るッ）

肉棒が、限界を訴える。

「はあ、はあ出すよ千亜姫さん…：もう出しちやうからねッ！」

早く、彼女に自分の精液を浴びさせたい。ドロドロにして、自分の物にしたい。

「体育の時、二回目が途中だったから…：はあ…：その分も、出しちやうから…：二回分一度に全部、ぶっかけちやうから!!」

自分勝手な欲望が、寸止め状態で終わっていた腰の動きを、どんどん速くしていく。

「あああ速いッ！ 進のが来てるッ、ガンガン来て、グチュグチュになってる！」

生徒会長と思えない発言を連発し、その豊満な身体が打ち付ける度に揺れる。



求められている事に堪らなくなり、千亜姫の潤んだ唇に舌を伸ばした。

「!? ……はあむッ……チュるる。舌が……あ……ん、はあ」

口を押し開き、中にお邪魔すると驚かれるものの、直ぐに歓迎されてしゃぶられる。唾液を吸られる音が水々しく、生々しい。

——レロレロ……チュルルッ……ヌルン、ヌルンッ……チュ、ジュルルウウッ。

唇と唇が繋がり合い、舌が交差すると積極的な絡ませ合いが始まった。

（うわッ……舌同士のキスって、こんなに気持ちいいものなんだ）

華奢な舌と擦れ合う度、ジリジリとした愉悦とむず痒さが、頭から全身に響く。

それは相手も同様らしく、強く触れ合う度に肩をピクッと震わせていた。

「はあ、はあ……ん、ンッちゆうう……ンばあッ……はあ〜」

息を荒くし、堪らないといった様子で顔を離す。唾液塗れの唇から伸びた舌と舌。そこにはお互いの交わりの証が、一本の濃厚な液橋となつて繋がっている。

「進……アタシ、もう……」

頷き、彼女を優しくベッドに押し倒した。真紅に染まった髪の毛が枕に沿って流れ、ミニスカートの中で擦り合わさっている、両太股を割り開く。

「千亜姫、もうココ凄いや……キスで興奮しちゃった？」

腰布を捲ると、ハイレグショーツの陰部を覆う場所に、じんわりと愛染みが広がっている。

た。女の子のいけない香りが、鼻に漂ってくる。

「だ、だって……アンタがあんなにエッチなキスしたからよ……進も、アソコが凄い事になつてゐるじゃない」

舌を積極的に伸ばしてきた恋人に指摘される。

ズボンの中で、早く交わりたいとばかりに膨らむ勃起。繋がりたいのは、お互い様。

「それじゃ、脱がすね？」

はやる気持ちを抑えつつ、ショーツを掴んでゆっくり引き下ろす。股布に隠れていたワレメが露になると、中心の溝から溢れ出た蜜で、肉丘周りが濡れて妖しい光を帯びていた。

「ッ……見てばかりじゃない……はあ……それだけで、満足なんて出来ないでしょ？」

恥ずかしそうに顔を逸らし、熱い深呼吸をしてエッチを求めてくる。

己のズボンから反り返った肉棒を取り出し、深く正座をして恋人の両脚の間に割り込み切っ先を潤んだ収縮膣穴に当て、

「あッ……進の硬いの……」

—— チュプッ……ジュブブウッ……ッズン！

「ん、ンッはあ……入ってええ……んああ！」

奥までしっかりと挿入し、子宮口を小突くと少女はピクンッと背中を反らせる。コスチュームの中で柔らかくはさむ乳房が、胸元から飛び出してしまふそうだ。

「ああ、締めてるッ……千亜姫、僕のちんぼそんなに好きなの？」

元々狭く引き締まっている道内が、より密着してきた。怪物の欲望塗れの時とはまた違う、優しい様な、甘える様な圧迫刺激。それに男根が何度も跳ねて応えると、更に肉ヒダが纏わり付く。

「だって、ンッ……進のだからぁ……は、あ……入っただけで、気持ち良くなっちゃうくらい……はぁ……大好きに決まってるでしょ」

今までに何度もシたのに、こんなにも素直な言葉を聞いたのは初めてだ。高まる気持ちだけで絶頂しそうになるが、パートナーと一緒にやないと、イきたくない。

「動くよ千亜姫……大好きな僕で、沢山感じて」

恋人としての初エッチ。それをしつかり目に焼き付けながら、腰振りを始めた。

「は、あッん、ンッ……いやらしい腰使い……アタシの中気持ち良過ぎて、ンッ！ もう出そうなんじゃないの？ ……はぁ……さつきからおちんちん、ビクビクなってる」

「うん、もう出ちゃいそう……はぁ……温かくて柔らかいし……それにヌルヌルで……大好きな千亜姫のエッチま○こだから、気持ち良過ぎるんだよ」

ゆっくり動かしているのに、格別の摩擦刺激を与えられる。予想外の締め付けや、ヒダで亀頭の窪みをしつかり擦られると、もう我慢出来ない。

「はぁ……千亜姫、速くするよ……いっぱい感じてッ」

自分だけでなく相手にも、もつと感じて欲しい。千亜姫の両膝の上に手を乗せ、腰を更に近付けて決り始める。

「ん、ンッ！ はああ、進のおちんちんが、中ッ……擦ってえ……あ、アッ！ はあ……だ、ダメ……エッチな声が、我慢出来ないッ」

顔を甘く歪ませ、曲げた指を咥えて快感淫声を懸命に堪えようとしている。

「我慢しないで千亜姫……はあ……エッチな声、僕に聞かせて」
手を伸ばし指をどかせて、更に速く突き続ける。

「そ、そんな聞かせるなんて……あ、う、ん、ンッ……はあ、ああッ……ちよ、ちよつと速、いッ……恥ずかしいのにッ、つ、突き過ぎよお」

いやらしい姿だけでなく、声も聞きたい。その為に腰の動きに、緩急や捻りを加える。

——ずるるう……ズボッズボッ！ ぐりゅ、ぬりゅ……ズリユリユ……ズンッ！！
「そんな、はああ……あッ！ アンッ！ お、奥ほじつちゃ……ん、ンう、ひゃあ!!」

両手で口を塞ごうとすれば、こちらも腕を伸ばして掴み、握り合つて逃がさない。

「はああ、い、意地悪う……はあ、アンッ！ 覚えてなさいよ進……今度アタシがする時は……ん、あッ……仕返しして、沢山気持ち良くさせちゃうんだからあッ」

潤んだ瞳で、悔しそうに宣言された。熱した甘い蜂蜜よりも、濃厚でいやらしい声。それが漏れるのを、下唇を噛んで抑えている。

「ふう、ンツ！ はあ、んンツ……ああ、そんな強く、突いッ、ちゃッ！ あ、アッ！
んンうツ……もうツ！ そんなにアタシの音が、ん、ンはあ。聞きたいの？」

身体をくねらせて、快感に耐えようとする恋人。腰を突き出す衝撃で跳ねる両脚が、小刻みに痙攣して悶えていた。

「うん、だって千亜姫のエッチな声で……ちんぽでしっかり、僕でちゃんと気持ち良くなつてくれてるって分かるから」

今までのエッチで、信じられない程の快感を与えてくれた。だから彼女にも沢山気持ち良くなつてもらおうと、精一杯腰をくねらせているのだ。

「だから、もつと聞かせて……はあ……僕だけに、千亜姫のエッチな声聞かせて」

「も、もうバカあ。なんてお願いするのよ……はあん……だったらもつともつと、エッチな事して……進の、彼氏の頼みだから……声を我慢しないであげるから」

恥ずかしそうに告白する恋人。濃厚なセックスを想像しているのか、胸のドキドキと共に柔らかい女壺が、ペニスを甘く締め付け始めた。

欲望を発散させる目的ではなく、恋人として求めてくれる。男として、これ以上ない自信と幸福感でいっぱいになった。

「千亜姫」

覆いかぶさり、この気持ちを伝える為に口付ける。

「あッ……はあ、ふ。ん、ンッ」

舌を忍ばせると千亜姫は迷いなく、口の中を躍らせて応える。握り合ったままの両手やお互いの身体には快感汗が浮かび、混ざり合ってコスチュームやシーツに染みてゆく。

「はあぁ……熱い。進の汗の匂いでいっぱい……溶けちゃいそう……」

唇に残ったキスの名残を舌で拭い、蕩けた瞳で見詰めて咬く。

「うん、僕も同じだよ……千亜姫のおま○こ、最初よりも熱くて……狭くなってるッ」

新しく溢れてくる愛液で、たっぷりと潤んだ膣。少し腰を揺するだけで敏感な亀頭が蠢くヒダの愛撫を受け、竿が狭い道中で抜かれ続け、確実に射精欲が沸き上がる。

「それじゃ、動くから……千亜姫のエッチな声、聞かせてもらおうからね！」

目前に絶頂が迫っていても、止める事なんて出来ない。再び上体を起し、腰をゆつくり性運動させてゆく。

「ん、ンッ！ あ、すご……これ……んはあッ。い、一回一回、強、いッ！」

速度は遅くても、力を込めた一撃をお見舞いする。股同士をぶつけ合う衝撃が、彼女の身体からベッドに響いて軋み始めた。

次に、亀頭が女陰から抜け落ちそうになるまで引き返し、素早く入り口をエラで擦る。

「んふうッ！ し、進ソレ……あ、ひヤッ。す、凄くエッチな音、響いちやうからッ」

発情液でヌメった狭口。そこで雄棒が何度も何度も往復し、粘着質な音が響く。

——ぎゅぽッ！　ぐぽッ！　ぬぽッ！　ちゅぽッ！

「あん、はあッ！　ひゃ、もつと解れ、ちやうじやない……ん、はあああ。今でもトロトロなのに……進のおちんちんで、アソコの形、変わつちやうじやないッ」

「うん、僕の形を覚えさせちやう……はあ……だから千亜姫も僕のちんぽに、エッチおま○この気持ち良さを覚えさせて」

そう言つて、愛液にまみれた肉棒を、勢い良く奥まで突き刺した。

——ジュヌボンッ!!

「あッ！　ひやううッ!!」

奥までびつたりとハマった勃起。恋人は甘い声を上げると、瞬く間に膣壁を密集させてしゃぶりついてくる。

「あッ……千亜姫……う、動いてるッ……す、凄いッ……」

「はああ、ああ……進の大きくてえ……はああ……硬いおちんちんに……アタシのおま○こを、教え込んだらうんだからあ……」

その為に少女は、自ら腰をくねらせてペニスの快感を貪り始めた。

男根のあらゆる方向が、潤ヒダ責めに見舞われてしまう。

（ああ凄いッ……い、今動いたら……本当にもう、出ちゃいそうッ！）
「ンッ、凄く硬くてえ……あああ、奥、もつと奥突きなさいッ……」

「気持ちいい所を責めて欲しいと、蕩けた声で訴えられた。腰を止めているのに射精欲がゾクゾクと下半身から昇ってきて、果てる前に出来るだけ気持ち良くしようとする。

「ん、アッ!! そ、そうソコ……もつと激しく、はあ、あ、あッ、アッ! めちゃくちゃにシなさいッ!!」

やって欲しい事を遠慮なく口にする恋人に、全力で応えてゆく。敏感な刺激に身体を絶え間なく悶えさせ、綺麗な肌に玉汗が浮かんできた。

(千亜姫さんのおっぱい、凄く揺れていやらしいッ)

腰を打ち付けるのを強くすればする程、彼女の巨乳がたぶんッ、たぶんッと柔らかくはずむ。コスチュームをよく見れば、硬くなった乳首が生地を盛り上げている。その姿に我慢出来ず、握り合っていた両手を解いて揺れる乳房を掴んだ。

「んはあ!! ああ、お、おっぱい……ん、ンッ! だ、ダメ……突きながら揉んじゃ、気持ち良くなり過ぎちゃうからあッ」

なら、もつともつと気持ち良くさせたい。上着の短い裾を捲り上げると、押しとどめられていた乳房がはみ出た。豊かな乳山を揉みつつ、ピンクの可愛らしい先端をシゴくと彼女は背中をピンッと反らす。

「ひやうううッ! あああ、だ、ダメえ……あ、アッ! お、おま〇こ突きながらッ……
あああ……お、おっぱいゴシゴシッて、んんうッ、ンんんう!!」

頑張って刺激に耐えようとしているのか、シーツを握って唇を閉じようとする。だが彼女の敏感地帯である膣の腹側と奥を、がむしゃらに突きまくった。

「ンツはああう！ あああだ、ダメダメえ、い、イッチやうから、もうイッチやうう!!」
小さい唇が開き、涎が口端から漏れる程に喘ぎながら、膣が激しく流動し始めた。

「あああ、千亜姫出そう……出ちゃいそう!」

「出しなさい……ん、アタシの中に進のを……はあ、アツ……沢山注ぎなさい……一緒にイッて、お腹いっばいに、ぶちまけなさい!!」

両脚を腰に絡ませてきて、懇願される。

男としてこれ以上ない高揚感で、射精間近の肉棒がより膨張し、狭い道を押し広げる。

「あああ、す、スゴ、い……ん、ンツ、はあ進、出しなさい……出してえ、アタシの中に全部出してッあ、あ、アツ! アタシと一緒にイッて、いきま○こで精液出してえ……沢山ドビュツてしてえ!!」

命令的だった口調が、絶頂が近付くにつれて淫らなお願いに。それだけ求められている事に感極まり、少しでも長く我慢しようとしていた絶頂が、一瞬で身体の内側で弾けた。

「あああ出る、出すよ千亜姫! 我慢して溜めた精液、全部出すよ!!」

奥深くに突き刺し、射精感で痺れる背中を反らせ、大量精液に肉棒がはずむ。

（はああ出す! 千亜姫に、僕の精液全部、注ぎ込むツ!!）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

**二次元
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

**二次元
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまっています。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!